様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2014
課題番号：２４６５３１１６

研究課題名（和文）学説史と科学計量学による社会学の日英米比較

研究課題名（英文）Scientometric and Historical Approach to Cross-National Comparison of Japanese, US, and UK Sociologies

研究代表者
太郎丸　博（TAROHMARU, Hiroshi）

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号：６０２７３５７０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：(1) ルーマン研究、在日研究、女性労働研究の引用作法を比較すると、女性労働研究でハード科学の特徴（雑誌論文重視、英語重視、同分野重視、新しい研究成果重視など）がもっとも顕著にみられたが、ルーマン研究と在日研究の間には一定の相違があるものの、どちらが「ハード」とは言い切れない結果であった。(2) また、日英米で用いられている社会学の方法と引用作法を比較すると、米国で最も計量社会学が盛んであったが、日英に有意差は見られなかった。また、米、英、日の順で、引用文献が多く、雑誌論文重視の傾向が見られた。

研究成果の概要（英文）：(1) We compared citation customs between sociological studies on Niklas Luhmann, Korean residents in Japan, and women's labor. The results shows that the studies on women's labor is characterized by "hardness," e.g. higher tendency to cite a paper on an academic, English journal. Although the studies on Niklas Luhmann are different from that on Korean residents in Japan in several respects, they shows the same level of hardness. (2) We compared sociological methods and citation customs in Japan, US, and UK. US sociology is more oriented to quantitative method than Japanese and UK sociologies are. Although we expected UK sociology is more oriented than Japanese sociology, there is no significant difference between them.

研究分野：社会学

キーワード：引用分析　科学社会学　科学計量学　内容分析　メタ社会学　社会ネットワーク　国際比較

１．研究開始当初の背景

研究が開始された当初、社会学の実情を科学計量学的なアプローチで明らかにしようとする研究はほとんどなかった。そのため、社会学の実情は、主に学説史家によって研究されていたが、学説史家はかなり昔のことを主に研究するため、最近の社会学の動向を十分に把握できていなかった。このため、個々の社会学者が、自分の個人的な経験にもとづいて、「社会学とは何か」、「社会学はいかにあるべきか」といった議論をしていたが（e.g. Elias 1970=1994, 盛山 2011）、しょせん個人の実感にもとづいているだけなので、大きな認識の相違がしばしば存在し、議論はすれ違いに終わることも多かった。このような状況は、年々増加する論文と、進行し続ける専門分化によって、さらに押し進められており、誰も社会学の全体的な状況を把握していないにもかかわらず、自分自身が社会学者であるがゆえに社会学のことはわかっている、といった安易な思い込みに基づく議論がまかり通っていた。このような社会学の状況は、学問のグローバル化と高等教育の変容が進む今日、非常に危機的なものと感じられた。

このような状況に対処し、学説史的研究を補完する方法として、科学計量学(scientmetrics) が有効であり（藤垣ほか 2004）、適切に用いさえすれば社会学史を補う手法となると考えられた。研究代表者は、社会学、特に数理社会学の現状についてすでに概観していたが、社会学の現状が正確に理解されていないことが議論のすれ違いの原因となっていることが多いと感じていた（太郎丸 2005, 2010b, Tarohmaru et.al 2002）。このような問題意識にもとづき、すでに社会学の科学計量学的研究をいくつか発表していたが（太郎丸,2010a, 2011, 太郎丸ほか 2009）、データの収集・整理が不十分なため、まだ本格的な研究成果の発表には至っていなかった。

２．研究の目的

この研究プロジェクトでは、日本の社会学の状況に関して、多角的にデータを収集すると同時に、日英米比較を通して日本の社会学の特徴を明らかにすることを目的にする。特に各国で用いられている方法、参照している文献の量・質、相互参照ネットワークのあり方、を比較し、日本社会学の特徴を明らかにすることを試みた。このような研究は、単に社会学の自己理解に資するというだけでなく、科学社会学的にも重要な知見となることが期待された。科学社会学では自然科学を主な対象としてきたせいか、国による科学のあり方の違いについてあまり研究されていない。しかし、ナショナル・コンテクストが科学／学問のあり方に影響を及ぼすことは十分に考えられるので、こういった社会学のあり方の国による相違やその背景を研究することは科学社会学的にも価値があると考えられた。

３．研究の方法

この研究プロジェクトで成果が公表されている研究は、いずれも社会学の論文をデータの基本的な単位とした。論文をサンプリングし、問題設定に応じて適宜コーディングしたり、適当な指標の値を測定し、データ・セットとして記録した。具体的には 3 種類のデータ・セットの分析結果が公表されている。

(1)　まず、日本の社会学の下位分野間の文化の違いを調べるために、1990 年から 2009 年の間に出版された、ルーマン研究、女性労働研究、在日研究、の 3 つの下位分野の文献のリストを作った。このリストの作成は、それぞれの下位分野を専門とする博士後期課程の大学院生に依頼した。次に出版年で層化して、各分野から一年ごとに論文を 1 本無作為抽出した。これらの論文の出版年、引用している論文とされている論文が同分野かどうか、被引用文献の言語、タイプ（単著の本か本の一部か雑誌論文かその他か）、をアフター・コーディングした。

(2)　Web of Knowledge ™ に所収の数理社会学関連の雑誌と代表的な計量社会学の雑誌や社会学分野で特に権威の高い雑誌のインパクト・ファクターと 5 年インパクト・ファクターの推移を調べた。

(3)　日米英の社会学で特に権威の高い代表的な雑誌をそれぞれ二つずつ選び、それらに 2013 年に掲載された論文をすべてサンプリングし、それらの論文で用いられている方法と引用している文献のタイプ（本か雑誌か、何語で書かれているか、等）とそれらの数を記録した。

４．研究成果

(1)　この研究は、社会学内部にある多様性を明らかにするためになされたもので、「ハードさ」の程度の違いを調べたものである。ハードさとは、数学や統計を多用する自然科学系の学問にどの程度近いか、を示す概念である。当初の仮説では、もっとも統計を多用する女性労働研究が最も「ハード」で、最も人文学的であるルーマン研究がもっともソフトで、質的な研究が中心の在日研究が両者の中間と考えられたが、実際には、ルーマン研究と在日研究のハードさにそれほど顕著な違いはなかった。図１は、各分野で引用されている論文のタイプであるが、女性労働研究で雑誌論文が最も多く引用されているが（雑誌論文の引用はハードな科学の特徴とされている）、ルーマン研究と在日研究の違いはほとんどない。

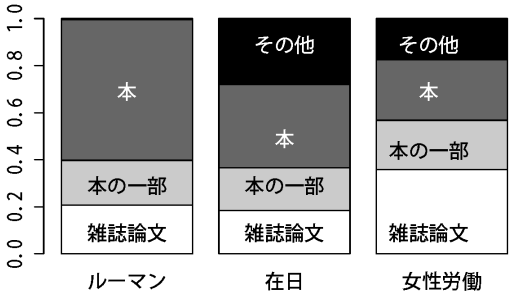

図１　下位分野別の引用文献タイプの比率

図 2 は、研究の最前線の論文の引用率と、基礎的な論文の引用率で、先行研究ではやはりハードな科学は最前線の論文を引用する比率が高いとされている。図 2 を見ると、確かに女性労働研究で最前線の論文の引用率が高いが、ルーマン研究と在日研究の差はそれほどはっきりしない。総じて、女性労働研究ではその他の 2 つの下位分野とはかなり異なる引用がなされていることが明らかであり、社会学内部での多様性の高さを改めて浮き彫りにした結果であった。

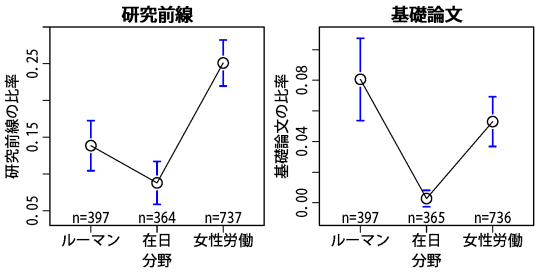

図 2　下位分野別研究前線と基礎論文の比率

(2)　数理社会学の現状を評価するために、数理社会学関連の英文誌と計量社会学の方法に関する英文誌、最も権威が高いとされる社会学一般の英文誌の 3 種類の雑誌の 5 年インパクト・ファクターを比較した。その結果を示したのが、図 3 である。Journal of Mathematical Sociology と Rationality and Society という２つの数理社会学関連雑誌は平均的な社会学雑誌とほぼ同じ 5 年インパクト・ファクターであったが、Social Networks という数理社会学関連雑誌は、他の 2 つよりも顕著に高い 5 年インパクト・ファクターを示していた。これは、社会学で最も権威が高いとされる American Journal of Sociology や American Sociological Review に迫る勢いであった。

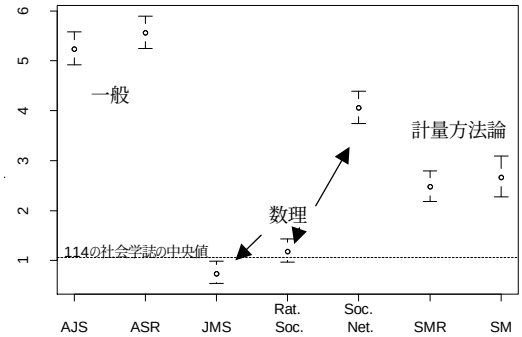

図 3　2012 年の社会学雑誌の 5 年インパクト・ファクター

出典：ISI Web of Knowledge ™ を 2013 年 8 月 14 日に閲覧, AJS: *American Journal of Sociology*, ASR: *American Sociological Review*, JMS: *Journal of Mathematical Sociology*, Rat.Soc.: *Rationality and Society*, Soc.Net.: *Social Networks*, SMR: *Sociological Methods and Research*, SM: *Sociological Methodology*

同じように数学的な議論であるにもかかわらず、計量方法論の雑誌の 5 年インパクト・ファクターは平均的な社会学雑誌よりも顕著に高いこと、Social Networks 誌は数理社会学関連といっても、ネットワーク・データの計量的（統計的）な解析が中心であることを考え合わせると、英語圏では数理社会学よりも計量社会学のほうが高く評価されていると考えられる。それゆえ今後、数理社会学の評価を高めていくためには、計量的なデータ解析との融合が求められることを示唆した。

(3)　日米英の社会学で用いられている方法と、引用作法の違いを明らかにするために、3 カ国の社会学で最も権威があると考えられる社会学一般の雑誌を 2 誌ずつ取り上げ、それらに 2013 年に掲載された論文で用いられている方法や引用文献の性質を調べた。

図 4 はそれぞれの雑誌で用いられた方法の比率を示している。ASR と AJS という米国の雑誌では理論の論文がほとんどなく、計量的な研究が過半数を超えているのに対して、残りの４つ（英国と日本）では、相対的に理論研究や質的研究（歴史、エスノ）が多い。日英を比較すると、若干、英国のほうが理論研究が多いようにも見えるが、統計的には有意でない。

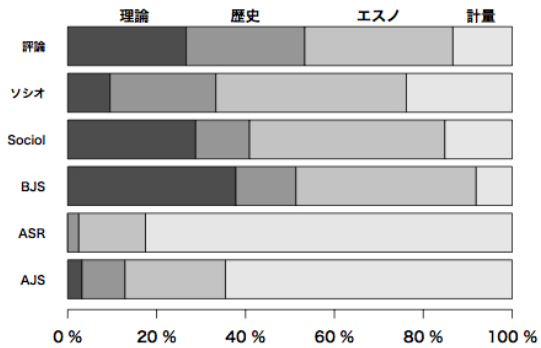

図 4　日米英の社会学雑誌で用いられる方法
評論: 『社会学評論』, ソシオ: 『ソシオロジ』, Sociol: Sociology, BJS: British Journal of Sociology, ASR: American Sociological Review, AJS: American Journal of Sociology, 理論：理論・学説研究、歴史：歴史・言説分析、エスノ：聞き取りや参与観察にもとづく研究

図 5 と図 6 は、6 つの雑誌に掲載された論文で引用されている文献数と、引用文献に占める雑誌論文の比率である。米国が最も多く文献を引用し、雑誌論文の比率が高い。英国は二番目、日本は三番目である。

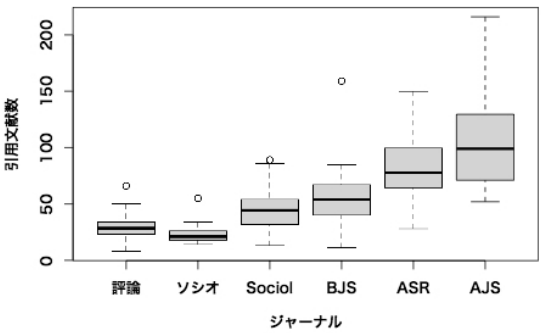

図 5　引用文献数の箱ひげ図

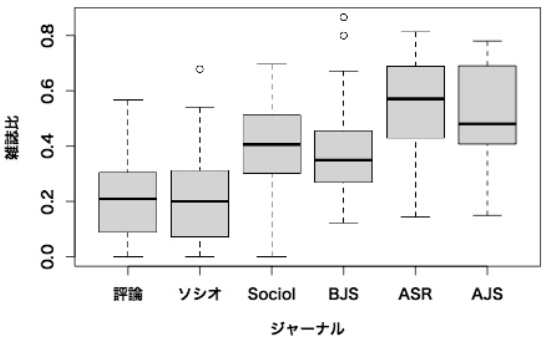

図 6　引用文献中に占める雑誌論文の比率

これらの結果は概ね事前の予測に一致するものであったが、唯一の例外は、英国と日本では用いる方法の比率に有意差がないことであった。米国で最も計量社会学が盛んで、雑誌論文志向が強く、引用文献も多いということは、米国のプロ社会学志向の強さからも容易に想像がついたが (Burawoy 2005)、英国は米国とはかなり異なる文化を持っているとはいえ同じ英語圏であるし、新自由主義的なプレッシャーは日本より強いことを示唆する研究成果もあったため (Platt 2012)、日本よりは米国に近いのではないかと予想していたのである。この結果は各国の社会学が強固な伝統を持っているために、財政的なプレッシャーだけでは簡単に変化しないことを示唆しており興味深い。

＜引用文献＞

① Burawoy, M. 2005. “2004 Presidential Address: For Public Sociology.” *American Sociological Review* 70(1): 4-28.

② Elias, N., 1970, *Was ist Soziologie*?, Juventa Verlag（=1994, 徳安彰訳『社会学とは何か ―― 関係構造・ネットワーク形成・権力』法政大学出版局）.

③ 藤垣裕子・平川秀幸・富沢宏之・調麻佐志・林隆之・牧野淳一郎, 2004, 『研究評価・科学論のための科学計量学入門』丸善.

④ Platt, J.. 2012. “Making Them Count: How Effective Has Official Encouragement of Quantitative Methods Been in British Sociology?” *Current Sociology* 60(5): 690-704.

⑤ 盛山 和夫, 2011, 『社会学とは何か: 意味世界への探究』ミネルヴァ書房.

⑥ 太郎丸博 2000「合理的選択理論の伝統と可能性」『理論と方法』15(2): 287-298.

⑦ 太郎丸 博, 2010a, 「数理社会学・リベラル・公共社会学: プロ社会学者は社会のために何が言えるのか?」『フォーラム現代社会学』9: 52-59.

⑧ 太郎丸 博, 2010b, 「投稿論文の査読をめぐる不満とコンセンサスの不在」『ソシオロジ』54(3): pp.121-126.

⑨ 太郎丸博, 2011, 「日本社会学の専門分化と下位分野間ネットワーク」関西社会学会第 62 回大会(於甲南女子大学 5/29).

⑩ Tarohmaru, H, N. Furumura, N. Nagamatsu and H. Utsumi, 2002, “Trend of Sociological Methods in Japan, 1959-2001,” Joint Conference of American and Japanese Mathematical Sociologists, in Vancouver on May 31 - June 2.

⑪ 太郎丸博・阪口祐介・宮田尚子, 2009, 「ソシオロジと社会学評論に見る社会学の方法のトレンド 1952-2008」第 82 回日本社会学会大会 (於立教大学 10/11)

⑫ Zuckerman , H. A and Merton, R. K.1971, "Patterns of Evaluation in Science: Institutionalization Structure and Functions of the Referee System," *Minerva* 9(1): 66-100.

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）
① 太郎丸博，2014.6，「統計・実証主義・社会学的想像力」『現代思想』 42 (9): 110-121（査読無）．
② 太郎丸博，2014.5，「数理社会学を社会調査の授業に埋め込む？」『理論と方法』29(1)，115-122（査読無）．
③ 太郎丸博，2014.3，「日本の社会学はどんな文献を参照しているのか：引用作法の下位分野間比較 1990-2009」『京都大学文学部研究紀要』53：235-255（査読無）．

〔学会発表〕（計 3 件）
① 山本耕平・太郎丸博，2013/10/12，「社会学の方法・引用文化の日米英比較」第86 回日本社会学会大会、於 慶応大学（東京都・港区）．
② 太郎丸博，2013/8/27，「数理社会学を社会調査の授業に埋め込む？」開催校企画シンポジウム「数理社会学教育の課題と展望」第 56 回 数理社会学会大会，於関西学院大学（兵庫県・西宮市）．
③ 太郎丸博，2012/5/26，「日本の社会学はどんな文献を参照しているのか――ルーマン研究、在日研究、女性労働研究の比較分析 1990-2009――」第 63 回関西社会学会大会、於皇學館大学（三重県・伊勢市）．

〔図書〕（計　0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0 件）

○取得状況（計　0 件）

〔その他〕
ホームページ等
http://sociology.jugem.jp/

６．研究組織
(1)研究代表者
太郎丸 博（TAROHMARU, Hiroshi）

研究者番号：60273570